

製塩で栄えた妻入りの重厚な街並み



杉玉の酒蔵が竹鶴酒造

竹原は、江戸時代に製塩で繁栄した町です。

緩やかにカーブする道沿いには、塗り壁の重厚な町家が軒を連ねています。ツシ二階建て、本瓦葺、妻入り商家が多いようです。

黒漆喰塗り、真壁作りも多く見られ、一階には下目板張りに出格子や平格子、二階には塗格子が多いのも特徴といえます。

街並みはきれいに保存修復されています。

江戸時代、瀬戸内の特産品のひとつに塩がありました。全国の8割が瀬戸内で生産された時代もありました。

竹原の製塩業は江戸中期に最盛期を迎え、生産量の大部分が江戸と北国に輸出されました。今に残る歴史的な街並みは、製塩で繁栄した時代の名残りです。



唐破風の流れる様な屋根と菱型の塗格子が華麗な商家 松坂邸



竹原上市の商いの守り神を祀る胡堂アイストップとして存在感がある



珍しい昭和初期の洋館歴史博物館として利用されている

入浜式塩田に適していた竹原の地勢地形

江戸時代、「入浜式塩田」が製塩の主流製法でした。これは潮の干満差を利用する方法ですが、竹原の立地と地形は、入浜式塩田に向いていたといわれています。

瀬戸内海は外海との出入りが絞られているため干満差が大きくなりやすく、なかでも竹原は内海の中央部にあるため、より大きな干満差が得られる場所でした。

竹原の塩田は賀茂川の三角州に広がっています。賀茂川河口には、横島とよばれる島が河口を塞ぐように横たわっていて、古くから川の堆積作用で浅瀬になっていたようです。その干潟が、江戸初期から相次いで新田開発されましたが、大きな干満差のために潮気が抜けず、耕作されずに放置されたため、赤穂から製塩技術者を招聘して塩田として活用したのです。

塩田への転換が功を奏し、製塩業は瞬間に竹原の主要産業になります。赤穂から製塩技術がもたらされてから2年後の慶安3年(1650)には、31軒の塩浜が完成しました。これを慶安の古浜といいます。

この塩田で多くの利益が得られたので、新たに67軒の潮浜が作られ、合わせて98軒、60町歩(60ha)となり、享保4年(1719)には広島藩の塩の税収の75%を占めるようになりました。

江戸中期、川村瑞賢による西回り航路開発に伴い、竹原は、江戸や北国への塩の積出港として、廻船業や問屋業が栄える活気にあふれた港町になります。

しかし江戸後期には、瀬戸内各所での製塩が進み供給過多に陥ったため、休浜法(秋冬は塩田作業を休止すること)や替持法(塩田を2つに分けて半分づつ作業すること)が考案され、近隣諸州と協定を結び、広大な塩田の維持に苦心したようです。江戸末期には、製塩の盛んな瀬戸内10州の同盟が成立しています。

昭和10年の呉線全線開通を機に、竹原駅南側の塩田跡地に、昭和鉱業(株)竹原電煉工場(現、三井金属鉱業竹原精錬所)が設置され、いまでは、世界の電池材料サプライヤーとして竹原の基幹産業となっています。その周辺では三井金属鉱業の社宅や一般住宅も増えて市街地は駅から西側に広がりました。

新しい市街地は、広大な塩田跡に広がったため、古い街並みは幸いにも残ることになったのです。



塩の積出し港の名残り
雁木、常夜灯、そして住吉神社が鎮座する

近くのまちあるき
尾道 鞆の浦 倉敷